

顕微鏡を用いた臼歯部う蝕治療 Restoration of Molar cavity use Dental Microscope

岡歯科
岡 忠克
Oka Dental office
Tadakatsu Oka



「緒言」

近年はMIの理念に基づいてう蝕除去を行い、可及的に健全歯質を保存し、審美的修復が可能であるということで、臼歯部う蝕治療においてもCR修復は多用されており、CRの適応はInを凌駕してどんどん広がって行く傾向にあると思う。

アマルガムの代用品として登場したCRは、CR自体とボンディング材の物性の向上により信頼できる修復材料としての地位を築きつつあるが、顕微鏡下の臨床においてさえ、きちんとした接着操作と確実な填塞操作は意外と難しく、テクニックエラーを起こしやすい修復方法でもあるとも感じている。

臼歯部の修復方法を選択するにあたっては、自分が失敗を起こしにくい方法を選択すべきで、かつ顎機能に調和した修復方法を選ぶべきである。自分の臨床においては、CRとInを症例によって使い分けた方が良いのではないかと考えている。

「方法と結論」

う蝕治療においてはそのほとんどが再治療であり、どのようにすれば失敗しないのか整理されないまま器具や材料、修復のテクニックばかりが注目をあびているのも実感として感じられる。

う蝕治療を失敗しないようにするためにはどうしたらよいか考えてみると、まずはう窩やう蝕の見逃しがないようにすること、次に顎機能に調和した適正な修復方法を選択することだと思う。そしてう窩の診査やう蝕除去 窩洞形成 CRの填塞操作 Inのセット時等治療の各ステップに顕微鏡を応用することで、長期予後が見込める良好な治療結果が得られるのではないかと考えている。

今回は基本的でありきたりな事を報告することになるかもしれないが、一つの症例を通して、顕微鏡動画を併用した臼歯部う蝕治療についての考察を述べさせていただくことにより、顕微鏡を応用することの必要性和修復方法の選択基準についての考えを報告させていただけたらと思う。